小督物語

――『平家物語』諸本間における主題の変容をめぐって――

李　鮮瑛

第一節　考察の目的と先行研究に基づく本研究の位置

ここで考察する「小督」[1]は、題名は覚一本の章段名をもちい、前半部は冷泉隆房との悲恋物語、後半部は高倉天皇との哀話で構成されている。

小督という女人は、後に見るように、権中納言正二位に至った藤原成範の娘であった。成範は、後白河法皇の乳母であった従二位朝子、通称紀伊二位と、その夫たるによって「天下の大小事を執行」[2]った信西（俗名、藤原通憲）入道の息子で、小督はその娘ということになる。出自が清華家といった貴顕ではないが、それに次ぐ公卿の家柄として、宮中に出仕が許され、ついには帝王（高倉天皇）に愛される女人となったわけである。したがってその恋の物語は、院政期官人社会において侍層と下仕えの女人の悲恋を描いた横笛説話、あるいは同じく侍層とその上の大夫層の娘の、悲惨な破局を描いた文覚発心説話などとは異なって、外形的には王朝の恋物語を踏襲している。しかし外形がかもし出す王朝物語的な雰囲気にもかかわらず、そこに造型される小督という女人には、宮廷政治と深く結びつく後宮の問題、具体的に言えば、どの后妃から皇子、すなわち次代の天皇が生まれるかといった〈産む性〉としての女人観と、帝王との愛をつらぬこうとする〈貞女〉としての女人観が明らかに施されている。このように、女人のセクシュアリティそのものが物語の主題に浮上してきたということは、院政期頃から中央進出が目立つようになった武家社会における女人の役割につらなる造型性を見せていると考えられる。そこに新たな中世的な女人造型の成立が認められるのではなかろうか。本稿では「小督」を対象

として、このような新たな女人の姿を、物語の歴史とフィクションの交渉を通して捉えることを目的とする。

以上のような問題設定から、「小督」に関するこれまでの先行研究の動向をとらえてみると、史実性の検証と説話形成論の視座からする物語としての変容の問題、この二つの方向に集中してきているように見受けられる。

そこでまず、史実性の検証を追求する先行研究を紹介すると、「小督」の前半部を占める冷泉隆房との悲恋物語が対象となるのだが、それについては、従来から隆房自身の手になる『艶詞』[3]からの影響が注目されている。そこには隆房が宮中に仕える一人の女人に抱いた思慕と苦悩が連作の歌詠群と長い詞書をもって展開されているが、隆房の恋の相手とされる女人が小督だとは書かれていない。おそらく、その名を明記することがはばかれる高貴な女人であったと思われるが、そのような女人に対して激しい恋の虜となった男の心情が綿々と綴られるだけである。その歌詠と詞書に対して先行研究は隆房と小督の虚構と史実を指摘するのであるが、『尊卑分脈』に藤原成範の子女として、女子小督のことが「高倉院小督局、名人也、隆茂（義）卿恋尽（書）主也」とあり、『平家物語』の諸本には、その恋の相手を隆房とするところから、彼ら二人を結びつけて史実と認めたいのであるが、断言はしがたい。佐々木八郎氏は『平家物語の研究』[4]で、その史実性を否定して、「むしろ一人の男性が藤原氏につながり宮中に仕えている一人の女性を思慕した恋情を、隆房がわが身に仮托したものと考えられよう」とし、『平家物語』の編著者が隆房と小督の恋愛沙汰として物語化したものと述べている。それに対して桑原博史[5]氏は、隆房の生涯と作品をめぐる詳細な検討の過程で、隆房の官位の停滞の原因を、小督事件にあると結論し、『艶詞』と「小督」の関連性をあきらかにしている。氏はいずれも史実にもとづくと判断しているわけである。

このように相反する見解を紹介したが、稿者は史実として捉えてもおかしくないと考えている。というのは、『平家物語』の「小督」に見られる二首の歌が隆房の歌であり、主なプロットは高倉院と小督の恋に据えられているこの小督物語に『平家物語』の編著者が隆房と小督の恋愛沙汰を恣意的に組み込む必然性が見当たらないからである。史料に確かめることのできないものの、高倉院が愛した小督という女人には帝の寵を受ける以前から何らかの恋愛沙汰があったのであり、それを隆房の『艶詞』で手掛かりを得て物語に入れたとみてよかろう。このように記事全体を史実としても矛盾することはないと思うのだが、むしろ『平家物語』研究者の間ではフィクションによる作り物語の趣向性を分析する方向の論考が相次いで公表されている。たとえば、長野嘗一氏は『平家物語の味わい方』で、小督が宮中から嵯峨に身を隠した部分ま

での物語は『艶詞』にもとづいているとしているが、「小督」の章句において隆房の歌とされている二首の和歌に関しては、『艶詞』でそれぞれの歌が別々の機会と場において詠まれていることを指摘して、『平家物語』の虚構性を指摘した。[6] 尾崎勇氏は、この『平家物語』の虚構性をさらにプレテキストのレベルで考証している。[7] 氏はそこで『源氏物語』の「桐壺」の巻、「夕顔」の巻、『長恨歌』、『長恨歌伝』、『宇津保物語』の「桜の上」の巻などの先行文学が「小督」に影響を与えていることを確認したのである。さらに氏は、先行文学との関連が不明のままであった、小督を強引に尼にした清盛の行動を、『栄花物語』[8]巻十一（「つぼみ花」）からの流れであることを見つけ出し、「小督」の物語としての完成を明らかにした。これは、『小右記目録』[9]では自発的出家とされる藤原元子のことが、『栄花物語』では強制出家に変改されている事実にもとづく推理である。史料[10]には「有子細歟不知其由」と原因の不明になっている小督の出家を、藤原元子をモデルにした物語構成に着眼しているという見解である。古典文学における先行文学の典拠をめぐる考察は、確証となるような手掛かりがない限り、恣意的独断的な継ぎ合わせに陥るという危険性を持たざるを得ないとはいうものの、氏の見解には首肯されるところが多い。

次に形成論の視座からする先行研究は『平家物語』発生以来、現在に流布する『平家物語』が成立するまで、様々に複雑な変化や増補などの形成過程があったとするのだが、古態性本文を多くとどめる諸本に遡るほど事件的・年代記的性格が強いという事実も注目されなければならない。というのは、その形成論に根拠を求めて中西美智子氏[11]は、次のような考察を通じて、屋代本が古態性本文をとどめていると推定しているからである。すなわち氏によれば、

（一）時間的にみて、屋代本「小督」の位置は史料から推測される小督の生年の時期と一致すること。つまり年代記的であるということ。

（二）物語の発端の文からの考察―それまでの物語本文との関連をめぐって

1　葵の前の死と結びつけた多くの語り系諸本の巻六の「小督」の発端の文は、物語の内容そのものとも、平家物語の内容とも、そしてまた『平家物語』作者の意図とも結びつかぬ不自然なものであるが、屋代本の場合は作者の意図と考えられるものとよく照応している。このことは本来的に「小督」が巻三に配置されたものであることをうかがわせる。

2　長門本や盛衰記の発端の文と位置とが矛盾すること。その矛盾は、語り系諸本の巻六に収められる「小督」の不

調和な位置と一致する。

「小督」を考察する際、他諸本と収載位置に差異を見せる屋代本が古態性本文をとどめていると判定する理由として、右の中西氏の見解は形成論が指摘する年代記的性格に結びつけているのである。

以上のごとき中西氏の立論を受けて、あらためて「小督」の収載位置を諸本で比較してみよう。まず前掲の屋代本では、「小督」は巻三、重盛の死去を伝える「同内府病悩事同死去事」の次にあり、その末尾にある

小松殿薨ゼラレテ後ハ、様々（二）人ノ心モ替リ、不思議ノ事共多カリケリ

という文に続いている。それに対して長門本は、巻十二新院崩御事の次に置いている。屋代本以外の諸本は長門本の構成と同じである。つまり屋代本が巻三の重盛薨去記事の傍系説話の位置にあるのに対して、長門本などの読み本系諸本および屋代本以外の語り系諸本では高倉院追悼説話群の一つとしているのである。ただし長門本の冒頭の文は屋代本と同じであるところから、比較的古い本文を残しているのではなかろうかと考えられる。延慶本と語り系の覚一本は同じく高倉院追悼説話群の中の「葵前」の次に置かれているのだが、覚一本によれば、「小督」を収載する巻六は、治承五年（養和元年）の正月一日（「新院崩御」）から翌々寿永二年二月廿二日の宗盛の従一位に叙せられたこと（「横田河原合戦」）までを記しており、その主要な内容は、新院、即ち高倉院の死と、清盛の死であり、その間に、木曾義仲挙兵の発端をなす記録が語られている。

このように、屋代本以外の諸本では、「小督」は「新院崩御」を追悼する説話・物語の一つとして「紅葉」「葵の前」と共に高倉院を中心人物にして語られている。それに対して、屋代本巻三の重盛の死（「医師問答」）に続く「小督」では果たして物語の主題が何に置かれているのであろうか。中西美智子氏のように形成論の問題としてではなく、物語論として考える場合、そのことがまず問題にされなければならないであろう。

物語論の観点から考察するとき、まずは『平家物語』の中でこの物語（「小督」）の占める位置が主題の変容をもたらしていると指摘できる。たとえば、屋代本の巻三は、物語の構想からいえば、「様々二人ノ心モ替リ、不思議ノ事共多カリケリ」と受けて時代の権勢者平清盛の「不思議」の事件群が配列されている個所である。即ち、王権（院政政権）をもの

ともしない彼の横暴ぶりが次々と増長してゆくというモチーフが展開されるのである。このような大きな物語の構想の内部に位置づけられた「小督」として捉えるとすれば、物語の中心人物はいうまでもなく時代の権勢者平清盛と認めてよかろう。そして物語の展開を支えるプロットでいえば、清盛の「不思議」な政治力がモチーフである以上、物語の前半部では清盛と小督の葛藤、そして後半部では清盛と高倉院の対立が主題となるといってよい。

以上のように物語のモチーフと主題を枠取るのが『平家物語』の年代記的構成である。即ち、この物語を時系列に沿って並べ直してみると、史実としての小督の出家の時期（次の第二節を参照のこと）がこの屋代本の「小督」の位置と一致するのである。注目すべきことは、巻三に布置された「小督」の時系列的な背景は、清盛の娘中宮徳子にまだ皇子の誕生をみない時期であったということである。この枠組みが「小督」の主題分析にいかなる影響を与えているかは次節以下で検討する。

次に屋代本以外の巻六（読み本系諸本の場合も巻六相当の章段に収められている）に収められている場合はどうか。すでに言及しているように、巻六の「小督」は高倉院追悼説話群に配置され、高倉院の生前のエピソードとして採録されている。とすれば当然、高倉院がこの物語の中心であって、帝の純愛を伝える恋の物語としてあるはずである。したがってそのプロットは、高倉院と小督の恋愛と、その恋愛が悲劇におわる結末にある。屋代本巻三では時代の権勢者であった平清盛は、この巻六ではむしろ相対的に物語の後景に退くかたちになっている。それは、清盛がこの物語の外部から、帝と愛妃の恋を破滅へと追い込む存在という造型へと変容していることを意味する。その位置は、かつて水原一氏が『平家物語』後半部の構想を物語の外部から動かす存在である源頼朝を「魔王」と規定した[12]例にならって、仏法世界にあって仏法の流通を障碍する「魔縁」になぞらえてよかろう。この魔縁的存在がかえって小督を出家に追い込むとみるわけである。しかし本稿の課題は、清盛の造型にあるのではない。そのようにして追い込まれた小督の出家がこの物語にとっていかなる意味をもつかにある。

以上本稿は、中西美智子氏が論じられた、「小督」が諸本の成長変化の過程で、屋代本のような巻三に収載された形態から、長門本、延慶本、覚一本の巻六の位置へと移されたという説に立ち、その移動に伴う主題の変容の考察を課題とする。

第二節　「小督」をめぐる史実

承安四年三月七日、高倉天皇は方違えのため法住寺に行幸し、十日に還御した。その方違えの行幸の時、建春門院に仕えていた健寿御前は、女房たちのなかにひときわすぐれて美しい女房を見て、それが小督であることを記している。

山吹のにほひ、青きひとへ、えびそめの唐衣、白腰の裳着たり若きひとの、ふたひのかかり、すがた、よそひなど、ひとよりはことに、はなはなと見えしを、いまだ見じとて、人にとひしかば、小督の殿とぞ聞きし[13]

桑原博史氏[14]の説によって小督の宮中への出仕を承安三年頃とすると、時に小督の年齢は一八才である。すると、これは小督が宮中に出仕した翌年のことになる。その後、健寿御前はこの行幸がきっかけとなって、小督と口をきくようになり、宮中から退出する時も、一緒に連れだって行動をともにしたが、やがて「その後ゆくへもしらで、二十余年の後、嵯峨にて行きあたりしこそ、あはれなりしか」と記すようになる。小督が出家して嵯峨に隠棲していた時に、健寿御前が再び出会った時の感懐である。この頃のことであろうか、健寿御前の兄弟に当たる藤原定家の『明月記』[15]（元久二年閏七月）を見ると、定家も嵯峨に住む小督を訪れている。

廿　日　早旦行嵯峨

廿一日　昏黒行高倉院督殿宿所（皇后宮御母儀）日来病悩被侍時之由聞之、年来於此辺聞馴之人也、仍訪之、女房出逢、即皈宿所

承安三年に宮中に出仕した小督が高倉天皇の寵愛を受けるにいたった時期は、冨倉徳次郎氏[16]によって、隆房の『艶詞』の歌および詞書が、安元二年の夏頃とされていることと、彼女が治承元年十一月六日に高倉院の皇女を出産することから、その前年の安元二年夏頃とみなしても問題はないであろう。その小督の出産について、兼実は『玉葉』[17]に次のように記している。

或人云、成範卿女（祇候内裏、年来通御云々）此一両日之間、有産事、皇子皇女之間、其説縦横、後聞皇女云々

小督が皇子でなく皇女を産んだことは、あるいは彼女にとって幸いなことであったかも知れない。というのは、未だ高倉院は中宮徳子との間に一子ももうけていなかった時期である。中宮の父親清盛が皇子誕生を焦っていたのは間違いないことで、そのことは、『愚管抄』[18]巻五、平清盛の娘徳子の立后記事に付載される、清盛による皇子祈り出しの伝承記事にもうかがえる。

承安元年十二月十四日、コノ平大相国入道ガムスメヲ入内セサセテ、ヤガテ同二年二月十日立后、中宮トテアルニ、皇子ヲ生セマイラセテ、イヨイヨ帝ノ外祖ニテ世ヲ皆思フサマニトリテ、ト思ヒケルニヤ、様々ノ祈ドモシテアリケルニ、先ハ母ノ二位日吉ニ百日祈ケレドシルシモナカリケレバ、入道云ヤウ、「ワレガ祈ルシルシナシ。今見給ヘ祈出テン」と云テ、安芸国厳島ヲコトニ信仰シタリケルヲ、ハヤ船ツクリテ月マウデヲ福原ヨリハジメテ祈リケル。六十日バカリノ後御懐妊トキコエテ、治承二年十一月十一日六波羅ニテ皇子誕生思ヒ如クアリテ、思サマニ入道、帝ノ外祖ニナリニケリ

歴史叙述の作品にもかかわらず、伝承記事が採録されるのは珍しいのだが、この伝承は、清盛死去後まもなく、宮廷社会に流通するようになった清盛の「不可思議」な力への驚異の記憶が産み出した伝承とされている。このような伝承が一二一〇年成立の『愚管抄』に伝えられている以上、清盛にとって娘からの皇子誕生の願望は熾烈であったと考えられる。それゆえ、帝と小督の関係に平静な気持ちでいられなかったのではあるまいか。

治承四年四月十二日の『山槐記』[19]の記事は、小督の出家のことを記しているが、その真相はその頃にはすでにわからなくなっていたようだ。

今日初斎院（御年四歳、新院第一御女内親王也、母権中納言成範卿女、号小督殿、即新院女房也、生此宮之後不参、

去年冬為尼、生年廿三也、有子細歟、不知其由）

この記事によれば、小督は皇女出産の後、そのまま宮中に参内せず、姿をくらまし、治承三年の冬に出家して尼になったという。『山槐記』の筆者中山忠親も理由は分からないという。『平家物語』では、高倉院の御子を産んだことで帝の寵愛がますます小督に傾き、中宮徳子への寵愛が薄れることを危惧する清盛を恐れて、小督が姿を消したとなっている（巻三、巻六に共通するプロット）が、事実そうかも知れない。ただ稿者は、『平家物語』のプロットの背景に清盛の後宮政策があったと考えている。それは次節以下の「小督」の分析で考えることにしたい。

小督の産んだ範子内親王が賀茂斎院となることに決定したのが、治承二年六月七日[20]のことであり、その頃にはすでに中宮徳子は範子内親王を猶子としていた。中宮が範子を猶子にしたり、宗盛の養女瑞子が範子の世話をしたりしている事実をもって、清盛が小督にそれほどつらく当たらなかったのではないかという証拠とみる上横手雅敬氏[21]の意見もある。しかしこれらは、いずれも清盛を始めとする平家一門による後宮対策であり、他家の妃が産んだ皇女を自家の支配下に置くということで、その背後にうかがわれるのは、高倉院血統（筋）の独占の意志であろう。即ち、皇女を産んだ小督には皇子をも産む可能性がある。中宮徳子に皇子誕生がなかった時点で、小督の存在は平家一門、とりわけ清盛にとって脅威であったろう。それゆえに清盛にとっては、どうしても小督の〈産む性〉を封印しなければならなかったのではなかろうか。

先の範子内親王を賀茂斎院に決定した直後の『山槐記』[22]の六月廿七日条に、次のような記事が見える。

近年依無其人、無斎宮斎院、為未曾有例、而皇女連々誕生、共為斎王、有神感歟

つまり、高倉院には斎宮斎院になる皇女がいなかった。ところが最近になって、皇女がつぎつぎと誕生し、ともに斎王となった。神の加護によるものかというのである。「皇女連々誕生」とは、範子内親王以外に藤原公重の娘帥局の産んだ功子のことで、その誕生は安元二年春のことである。高倉院は中宮以外の妃に御子を産ませる能力のあることを実証してみせた。そのことからも、清盛にとって、小督に皇子を産む可能性があるということは、恐れるべきことであったのだろう。

とすれば、どうして公重の娘ではなく、小督が清盛の脅威であったのだろうか。『皇帝紀抄』[23]巻七、高倉院の条による

と、功子内親王の母に関して「母前少将公重朝臣女」とある。四位クラスの公重は、清盛にとって身分的に問題とならなかったであろう。彼の娘が徳子よりも先に皇子を産んだところで、嫡系にはなれるはずもなかった。しかしそれに比べると、小督の父権中納言成範は清盛にとってはあなどれない存在であった。彼自身の身分というよりも、彼の母が後白河院の御乳母従二位朝子[23]だったからである。

したがって、もしその孫娘（小督）に徳子よりも先に皇子が生まれたならば、高倉院の第一皇子として嫡系の血統を継承するという危険があった。いうまでもなく清盛にとっての危険な存在、小督の〈産む性〉を高倉院から引き離さねばならなかった。おそらく清盛の後宮対策は、前掲した小督が「生此宮之後復不参」という記事の背景と密接な関係があったのではないかと類推されるところである。

しかし、幸運は清盛のほうにあって、斎宮斎院となる皇女がいなかった一、二年の間に、二人の皇女をみたわけであるから、清盛にとってはむしろ幸いなことであったろう。そして、中宮よりさきに皇子を産むかもしれない小督が姿を消したことも清盛の願うところであっただろう。このあたりのことは、あくまでも想像によるしかないが、小督が宮中から姿を消したのは、前述してきた清盛の後宮対策を意識して、小督が自己の存在によって高倉院と時の権勢者の間に対立が生じ、高倉院の地位に不利な状況が起こることを案じた結果とみるべきであろう。

物語によれば、宮中から姿を消した後、高倉院は仲国に小督の行方を探させ、宮中に連れ戻させたことになっているが、おそらくフィクションであろう。というのは、治承元年十一月四日条の『玉葉』に「此一両日之間、有産事」とある記事から小督が宮中にいたこと、また出産の前には必ず宮中を退出することから小督の退出があったとすれば、少なくともこの頃のことであることがわかる。そして、さきの『山槐記』の治承四年四月十二日の「去年冬為尼、生年廿三也」という記事によると、出家が治承三年の冬になるので、この両記事を考え合わせると、宮中退出から出家まで一年以上の隔たりがあることになる。フィクションはこの間のこととして作為されたのだろうが、史実では小督は皇女を出産した後に、宮中から退出し、行方をくらましている。そしてその後は宮中に再び出仕することなく、出家したとされている。

ところで『月詣和歌集[24]』に実国の歌として、次のような歌がある。

高倉院女房さまかへてのちいくほどもなくて院もかくれさせ給ひければいひつかはしける　大納言実国

てる月を見捨て出しことわりは空かくれぬる今こそはしれ

この詞書にいう「女房」が誰であるかはわからないが、冨倉氏[26]も述べているように、小督と解釈してよかろう。高倉院崩御の時、院に仕えていた女房の多くが様を変えたということは、同じ歌集に載る通親の歌の詞書（巻第十　十月附哀傷）に、

高倉院隠させおはしましける時、善知識にて長楽寺ひしりまゐりて侍りけるか、をはらせおはしけれとも、猶しはしさふらひけるを、戒師にて近くめしつかひける女房あまたさまかへ侍りけるに

とあるところからもうかがえるが、実国の歌に見える女房の出家が高倉院生前のことであることは、詞書や歌で明らかである。それに「てる月を見捨て出し」とあることからも、「てる月」に擬せられる高倉院を見捨てて出家した女房で、さらにこの女房が、高倉院の死と直接に関係があると詠まれている。これらを考え合わせれば、実国は小督のことを歌にしたと推測される。天下を御治政なさっていた高倉天皇の寵愛を見捨てて、あなたが宮中を退出なされ（出家し）た理由を、天皇のおかくれになった今になって分かりました、と詠んだ実国の分かった「ことわり」とはなんであろうか。

おそらくそれは非情な「ことわり」であったはずだ。なぜならば、小督が宮中を退出させられたことと、清盛の後宮対策、すなわち、娘徳子に皇子を生ませ、次代の天皇として皇統を継がせるという政略とが結びつくとすれば、その対策が現実化した後は、高倉院が崩御されなければ清盛の企図は完成しないということになる。院が生きていて、さらに次々と後宮の妃たちに皇子を産ませたら、外戚としての身分の関係からして、または高倉院の意志で徳子の産んだ安徳帝の後継ぎにそれら異母弟の皇子を皇位に就ける可能性があった。とりわけ憂慮されるのは、清盛の権威をしのぐ摂関家の姫君の中に、適齢期に達する者が出てきて、入内し天皇との間に皇子が生れたら、皇統（嫡系）を奪われる可能性が大いにあったろう。だとすれば、高倉院の崩御はその可能性が閉じられたことを意味する。

実国は、天皇の崩御によって、おそらく清盛の政略がどのようなものであったのかを悟った。その時になって始めて、小督が高倉院の許を去った、あるいは去らされた理由（「ことはり」）が分かったのである。すなわち、小督の内裏退出

（あるいは追放）は清盛による次代の皇統問題と深くかかわっていたことを、実国は悟らされたのである。実国は小督の運命に皇統問題という大きな政治性が覆っていたことに同情して、共感の歌を詠んで贈ったのであろう。しかし、史実はきわめて残酷で、清盛という権勢者が固執した皇統は彼の死後あっけなく瓦解し、結局は清盛も小督も歴史と個人の葛藤の裏に奔弄された人々になった。

第三節　小督物語における主題、その変容（其の一）――内裏出奔に至る経過――

高倉院の逝去と清盛の死が語られ、平家一門の権力・権威の動揺が顕在化しはじめる巻六において、小督物語は何を語ろうとしているのだろうか。その主題を捉えるためには物語のモチーフになる清盛と小督、清盛と高倉院の二つの人間関係の矛盾を明らかにする必要があると思われる。というのは、『平家物語』の諸本間に微妙な隔差が認められ、そのためそれぞれの主題のずれが見られるからである。このように流動する「小督」の主題を考察するために、まず、小督の内裏出奔に至る経過を諸本で見てみることにしよう。

その考察に入る前に「小督」の前半の梗概を屋代本・覚一本を中心に記述してみると、次のようである。

高倉院の中宮建礼門院に仕える小督という女房は、冷泉隆房の熱い恋情を受け、ついになびくことになったが、まもなく小督は高倉院に召されることになった。物語は、それまで相愛の仲であった小督と隆房が「あかぬ別」をせざるを得なかった経緯を語る。しかし隆房は、小督が帝に召された後も恋慕の思いを断ち切れず、未練のゆえ、「し（死）なんとのみ」願うが、それとは対照的に小督のほうは、「つてのなさけ」さえもかけず、非情さをみせる。その該当場面を見てみよう。

「我已ニ君ニ召レ進ル上ハ、詞カハシ、文ヲモ見ベキナラス」トテ、ツテノ情ヲダニモ不被懸、小将責テノ思ノ余リニ（中略）女房聴返事セバヤト思ハレケルガ、君ノ御タメ御背メタサニ、手ニダニ取テ見給ハズ。上童ニ取セテ壺ノ内ヘゾ投出シケル（屋代本）

加様ニ有ケレドモ、小督局、「吾内裏ニ被召テ参ナム後、争御後グラク、カヽラムフシヲ見ルベキ」ト、心ヅヨク思

ナシテ、急取、ツボノ内ヘゾ投出シ給ケル（延慶本）

注目すべきは、御簾のうちに投げ入れられた隆房の歌さえも手にふれずに、殿上童に捨てさせるといったあからさまな態度である。公開の場で隆房の求愛の拒否を、眼をこらしていたであろう女房たちを証人に仕立てているように見える。これを通盛と小宰相の恋物語で、通盛にまるめ込まれた小宰相の青侍が通盛の恋文を、上西門院の御所に急ぐ小宰相の車の中に投げ込んだ際の彼女の態度と比較できる（引用は詳しい延慶本による）。

小宰相殿、「是ハイカナル人ノツテゾヤ」トテ、車ノ内ニテ忍サワギ給ヘドモ、御共ノ者共モ「シラズ」ト申ケレバ、大路ニステムモサスガナリ、車ニヲカムモツ、マシクテ思煩ケルホドニ、御所モチカク成ニケレバ、イカニスベキ様モナクテ、袴ノ腰ニハサミテ（第五本「通盛北方ニ合初ル事付同北方ノ身投給事」）

通盛から求愛されていることを「ハヅカシ」と感じ、それを隠そうとする小宰相である。これこそ典型的と思われてきた控えめな宮中女人の造型といえようが、小督は一切躊躇もなしに隆房の求愛の事実を人目にさらし、拒否の姿勢をあからさまにした。これは小宰相のみならず、私的な事柄が漏れるのを、極度に「ハヅカシ」く感じる王朝期の女人とはまるで異なる造型を露呈している。では、なぜ小督がそのような異常な行動に出たか、その背景をさぐる必要があろう。この小督の冷淡な行為の背後には、帝への一途な恋情よりは「吾内裏ニ被召テ参ナム後、争御後グラク、カヽラムフシヲ見ルベキ」と案じた賢明な身の振り方で、冷徹な院政期以降の後宮の現実を反映すると思う。その態度から逆に入内した女人（娘）たちの皇統にかける情熱が読み取れるのである。それはいうまでもなく、さらに背後には娘が出た家筋の願望があり、彼女らはその期待を十分に自覚していたであろう。

ところで、小督ごとき納言クラスの出自の妃が皇統に望みをかけるということは王朝期の後宮では考えられない事態であった。その政治的背景としては、第一に院政という政治形態の出現が考えられる。その過程で、院政を補佐した院近臣が台頭し、それに伴って従来の摂関家の地位が相対的に下降し、院の後立てで院近臣らにその娘を入内させるチャンスがめぐってきた。そして第二の背景としては、摂関家の姫君で入内した者に長らく皇子誕生をみなかったことがあげられよ

う。[27] それは摂関家の一員であった慈円の『愚管抄』[28] 巻五にもうかがえる。院政期の天皇の生母の叙述をみると、崇徳院の場合、

サテ白河院ハカノ公實ノムスメヲトリテ御子ニシテモタセ給リケルヲ、鳥羽院ニ入内立后シテヲハシマス。待賢門院ト申コレナリ。ソノ御腹ニ王子イクラトモナシ。ハジメハ崇徳院、次二人ハナヲミヤ、目ミヤトテ、ヲヒモタヽデウセサセ給ヌ

と公實の娘、待賢門院のことを記しているし、保元三年から永万元年まで在位した二条院の場合も、やはり、母は大納言藤原経実の女贈皇太后太后懿子であったように、ほとんど院近臣の娘であったことがわかる。

このような背景を考慮すると、高倉院の寵愛を受けるようになった小督にも皇統につらなる皇子を生めるチャンスがめぐってきた。そこに中納言藤原成範の家の願望が重なるのは当然である。小督にしてみれば、将来生むかもしれない皇子の出生（血筋）に関して一点の疑念もあってはならないのである。おそらく、この将来の皇子にかける願望が院への情愛と結びついて、隆房からの求愛の恋歌を、あのように激しく拒絶させたのであろう。

このように皇統と結びつくかもしれない皇子出生という将来の可能性が想定されるとすれば、小督の態度は高倉院という個人のみならず、皇統、つまり天皇家の継嗣にかかわることでもある。したがって彼女の態度はいわば〈家〉への貞節ということでもある。〈家〉の論理にみずからを賭ける、あるいは束縛されるようになる中世的女人造型を、この小督の振舞い・態度にすでに認められると考えるのである。

とすれば、諸本の検討によって、清盛の激しい―若い女を「なきものにする」くらいの―怒りが何に起因しているかという従来からの疑問にも一定の解釈の方向性が与えられる。この方向性を、清盛と小督、清盛と高倉院の対立・葛藤の構図を諸本で対照することによって確認してみる。まず、小督に向かう清盛の激しい怒りは、「小督」の構成における清盛対高倉院の宮廷政治の葛藤構造の現われとして読み取るべきことに気づかされる。

そこで、屋代本・長門本・覚一本において清盛の怒りを見てみると、

中宮と申すは御娘、少将は聟也二人の聟を小督殿にとられ給ひ、太政入道安からず腹を立給ひ、いやいや此事、小督があらん限は此世の中よかるべし共覚えず

というところに表われている。つまり、清盛の怒りは、高倉院と隆房という二人の婿の心を捕えた小督が生きている限りは、娘たちの夫婦仲がうまく行きそうにないということに由来していて、その怒りは、言うまでもなく小督に向けられていることが分かる。この清盛の怒りを規定している枠組みといえば、後宮の問題というよりも、凡下の貴族の夫婦生活に波紋を及ぼす愛人問題というレベルの浮気沙汰ということだろう。

ところが、延慶本の対応個所の清盛の言葉は明らかに先の三本と相違している。

サテ主上ハ小督局ノ御志深カリケレバ、中宮ヲバスサメマヒラセテ、被召事マレナリケレバ、入道大相国大ニ怒給テ「浄海ガ娘ナムドヲ加様ニスサメサセ給ベキ事ヤアル。メサズトモ只マヒラセヨ」トテ、押テハ進セナムドセラレケリ。是ヲゾ主上御心ヨカラヌ事ニ被思食ケル。カクテ彌小督局ハ御寵愛イヤメヅラニシテ、惣テ中宮ヲ被思召事ナカリケレバ、入道彌不安思テ、怒ヲナシテ、アオキ死ナバサテモナクテ、小督トカヤ云者ヲ被召ナルゾ

他諸本の「小督があらん限は此世の中よかるべし共覚えず」という清盛の懸念のかわりに、「メサズトモ只マヒラセヨトテ、押テハ進セナムドセラレケリ」というところには、明らかに延慶本の清盛の怒りが小督ではなく高倉院に向かっていることと読み取れる。清盛の怒りは、帝と小督の恋愛関係―というよりも、寵愛・被寵愛というべきであろう―の背後に、「中宮ヲ被思召事ナカリケレバ、入道彌不安思テ、怒ヲナシテ」とある皇子の誕生問題がからんだものであった。もしも屋代本のごとく巻三に配列された位置でこの物語を読むとすれば、年代記的背景はまさにまだ中宮徳子に皇子の誕生を見ない時期で、そのような史実をふまえるならば、清盛の切実さが伝わってこよう。清盛からすれば、愛情の如何にかかわらず、高倉院が中宮を寝所に召さねばならないのであった。つまり、いまだ皇子のいない天皇にとっては個人のレベルを越えて、中宮との間に皇子の誕生をもたらす皇統（王権）の行方にかかわる緊要事であったのである。

延慶本において清盛の怒りは二人の婿の心を奪った小督の存在にあるのではなく、前章段で高倉院の心を惑わした「ア

オヰ」が世を去ってまもなく、今度は小督に惹かれてしまう高倉院の態度に対してであった。すでに指摘したように、高倉院が「小督局ノ御志深」くなるにつれて、娘の中宮徳子を「被召事マレナ」る行動そのものに怒りを感じていたのであった。それゆえ「メサズトモ只マヒラセヨ」というような、帝の意志にもかまわず、強引に中宮を夜の寝殿に参らせるといった横暴を見せる。それは露骨にいえば、皇子をなすためなら、娘が単なる性欲の対象であってもかまわないということで、そのことは何よりも皇子の誕生、皇統継嗣の問題が清盛を苛立たせていたことを代弁する。

小松殿が死に、清盛の横暴が極まりはじめる屋代本巻三を『平家物語』の全体の時系列で考えると、清盛は熱烈に皇子誕生を待ち望んでいたであろうし、それを延慶本の編者が「メサズトモ只マヒラセ」るほどの清盛の横暴ぶりを描くことによって、清盛対高倉院という宮廷の緊張感を反映させた小督物語に仕立てたと考えられる。小督物語の従来の疑問に対して稿者の解釈は以上のようなものである。

このように考えられるとすれば、延慶本の「小督」はやはり、本来語り系十二巻本の巻三相当の章段の小松殿死去記事に接続してあったのではなかろうかと思われる。というのは、現在の高倉院追悼説話群の位置であれば、中宮徳子所生の言仁親王（後の安徳天皇）の即位はすでに実現しているのであって、そのために前掲のごとき清盛の怒りと、それに伴う小督の内裏追放は些か物語の構想から浮きあがった感じがするからである。したがって高倉院追悼説話群に移されたとき、この物語は高倉院と清盛の宮廷対立のモチーフから、清盛によって引き裂かれざるを得ない高倉院と小督の悲恋へと主題を移行せねばならなかった。延慶本が前掲の高倉院と清盛の葛藤を物語の全篇に残しながら、その一方で清盛と小督の対立をモチーフとしてうかがわせているのは、まさに清盛の魔縁としての造型への接近であり、この物語の過渡的形態を見せてくれているのではなかろうか。

ところで、延慶本の先の箇所で清盛の行動に対して「是ヲゾ主上御心ヨカラヌ事ニ被思食ケル」と描写しているところは注目される。それを、次の小督の内裏出奔の後の高倉院の行動と関連づけて考えてみよう。覚一本の本文を取り上げるが、これは延慶本、盛衰記もほぼ同文である。

主上御歎なのめならず。ひるはよるのおとどにいらせ給ひて、御涙にのみむせび、夜は南殿に出御なて、月の光を御覧じてぞなぐさませ給ひける。入道相国是をきゝ、「君は小督ゆへにおぼしめししづませ給ひたんなり。さらんにとっ

ては」とて、御かいしやくの女房をもまいらせず、参内し給ふ臣下をもそねみ給へば、入道の権威にはゞかって、かよふ人もなし。禁中いまいましうぞ見えける。

「ひるはよるのおとど」に、「夜は南殿に出御な」る高倉院の行動は、「主上御心ヨカラヌ事ニ被思食ケル」ということの、清盛に対する帝の精一杯の抵抗の姿勢である。「ひるはよるのおとど」、「夜は南殿に」というのは中宮徳子を始めとする后妃との同衾を拒否するという抵抗の表現で、たんに侍臣たちの眼を避けての悲しみの表出というだけのことではなかろう。とりわけ中宮徳子との同衾の拒否は、そのまま中宮の〈産む性〉を帝自身が封印することであって、その腹からの皇子誕生の拒否につながる。

ただ、巻六に位置する諸本において、前の章段「葵前」にも「されば御ながめがちにて、よるのおとゞにのみぞいらせ給ふ」という、「小督」と同文照応がみられることから、愛する者の死を悼む高倉院の心情をうかがわせる行動として解釈されなくもない。しかし「小督」においては、そのような高倉院の行動に、「御かいしやくの女房をもまいらせず、参内し給ふ臣下をもそね」むという清盛の横暴が報復としてとられているし、その結果「禁中いまいましうぞ見え」たと描写されるから、この個所において『平家物語』は清盛の横暴を触発させるものとして高倉院の行動を捉えていると見るべきであろう。その点からすれば、明らかに清盛の政略への対抗・抵抗と読むべきところである。そのような文脈は小督が帝の御子を身ごもったことを知った時も、清盛は

小督ハ失タリト聞タレバ、其儀ハ無テ、深ク隠置レタリケリ（延慶本）
小督失たりとは君の御虚言にてありけるぞ、未内裏に候なり（盛衰記）

と、高倉院の行動を自分に逆らう抵抗と断じている。ここからも、「小督」の構想に高倉院との対立関係を主題とする意図が働いていることを認めることができる。

もちろん、史料によって高倉天皇をみると、仁安三年（1168）八才で即位[29]したが、「此君は無下に幼主の時より性を柔和に受けさせ給へり」（「紅葉」）と覚一本にもあるように、父後白河院の権力と母建春門院の華やかさの蔭にかくれた存在

で、詩歌管絃を唯一の慰みとして過ごした穏やかな人物である。したがって清盛との対立を思わせることは史実上には認めがたいとしても、『平家物語』が、ここにおいてひそやかではあるものの、清盛との緊張感をにおわせたのは、皇統をも侵犯するほどに悪行を重ねる清盛の横暴を浮き彫りにするためではなかろうかと考えられるのである。

第四節　むすび

本稿では、諸本間の微妙な隔差によってそれぞれの主題のずれが見られる『平家物語』の「小督」が、高倉院の逝去と清盛の死が語られ、平家一門の権力・権威の動揺が顕在化しはじめる巻六において目指すものと、巻三の重盛の死に続く時系列的な位置に配置する諸本の意味を捉えるために、物語のモチーフになる清盛と小督、清盛と高倉院という人間関係の矛盾を考えてみた。

その人間関係を察した結果、巻六の高倉院説話群に位置する覚一本の場合、清盛の怒りは二人の婿の心を捕え、娘たちの夫婦仲が危ぶまれる状況に追い込んだ小督に向けられていた。それに比して延慶本は同じく巻六相当に位置しながらも、清盛の怒りが帝と小督の関係の背後にある皇子誕生問題がからんでいて、それが強引に娘の中宮を夜の寝殿に参らせる横暴に拡大して清盛対高倉帝の宮廷の緊張感を反映させるといった相違を見せていた。

ここに第一節で触れた形成論的な観点から延慶本を再考すると、もしも延慶本のこの物語が巻三に配列されていたならば、中宮徳子に皇子の誕生を見ない時期という年代記的な背景が裏打ちされて、まさに史実に基づく皇統継嗣にからんだ清盛の切実さが明確になるであろう。ゆえに、延慶本が清盛と小督の対立をモチーフとしながら、その一方で高倉院と清盛の葛藤を物語の全篇に残しているのが、延慶本におけるこの物語の過渡的形態を表すことと推論される。

それと同時にこのような延慶本の物語性は、逆に、物語を形成した史実性の検討で考察した高倉院崩御に際する歌詠とされる実国の「ことわり」が示唆する非情な現実をさぐることも可能にしたのである。

以上、史実と延慶本を主とした物語性の考察で浮き彫りになってきたのは、『平家物語』は「小督」を通して当時の平家一門の後宮対策を明かそうとしたと読み取れるし、延慶本はさらにその清盛対高倉院、清盛対小督の関係を克明にしたということである。それを小督という女人にフォーカスをあてて考えれば、皇統と結びつくかもしれない皇子出生という

将来の可能性がこの女人にして、「吾内裏ニ被召テ参ナム後、争御後グラク、カヽラムフシヲ見ルベキ」といって恋文を投げ捨てさせ、冷徹な院政期以降の後宮の現実を身で示したと理解すべきである。その皇統にかける情熱は一見、王朝期の摂関家の入内した女人のそれと比類しながらも、武家台頭の時代的背景と突き放せない〈家〉への貞節という論理で彼女に課されたものであった。王朝期の女人造型には見られなかった自己意志の貫徹を見せながら〈家〉の論理にみずから賭ける、あるいは束縛されるようになる中世的女人造型を、この小督の振舞い・態度に認められたと考えるのである。

注

(1) 登場人物の名でありながら、章段名でもあるため、章段名としていうときは「小督」と表す
(2) 日本古典文学大系『平治物語』上、信頼・信西不快の事
(3) 「私家集大成 中世Ⅰ」『艶詞』明治書院、一九八四
(4) 佐々木八郎氏、『平家物語の研究』
(5) 桑原博史氏、「平安末期の一貴族藤原隆房の生涯とその作品」『中世物語の基礎的研究資料と史的考察』第一章所収
(6) 長野嘗一氏、『平家物語の味わい方』一〇三～一三七頁、一九七三
(7) 尾崎勇氏、「「小督」の一考察「平家物語」の虚構性について」『防衛大学紀要』所収、一九八三
(8) 日本古典文学大系『栄花物語』巻十一「つぼみ花」
(9) 『大日本史料 三条天皇 小右記目録』五六六頁
(10) 『山槐記』治承四年四月十二日条、史料大成所収
(11) 中西美智子氏、「平家物語成長変化の一断面屋代本「小督」と他本との関係」『文学語学』、一九五八、六
(12) 水原一氏、「『平家物語』巻十二の諸問題――「断絶平家」その他をめぐって――」『駒沢国文』、一九八三、二
(13) 日本古典全集『健寿御前日記』一六〇～一六一頁
(14) 前掲論文
(15) 『明月記』元久二年七月条
(16) 富倉徳次郎氏、『平家物語全注釈 中巻』一八一～二頁、角川書店
(17) 『玉葉』治承元年十一月四日の条
(18) 『愚管抄』巻五、二四三頁

(19)『山槐記』前掲個所
(20)『山槐記』治承二年六月七日条
(21)上横手雅敬氏、「1ひときわ華麗な美女」『平家物語の虚構と真実』講談社、一九七三
(22)『山槐記』の治承二年六月廿七日条
(23)『皇帝紀抄』巻七、高倉院の条
(24)紀伊二位朝子の出自については諸説あるが、『尊卑分脈』〈貞嗣卿孫〉に「女子（従二。朝子。紀伊二位。小納言入道信西室。民部卿成範卿母。後白河院御乳母。号アマセ是也）」とあるのが有力。彼女への後白河院の信頼は『今鏡』「すべらぎの下第三」に小納言通憲のところに詳しくて、八十島の使いを果たされて詠んだ「すべらぎの千代の御影にかくれずは今日住吉の松を見ましや」の歌に確かめられる
(25)『月詣和歌集』巻十、十月付哀傷
(26)前掲論文
(27)河野泰男氏、『今鏡全釈　上』三六三頁、福武書店
(28)『愚管抄』巻四、崇徳院の条、二〇八頁
(29)日本古典全集『健寿御前日記』一六〇～一六一頁